

意識」というものが幼児期において人間の成長（年齢的発達）と平行していることを物語ると解されよう。

(三)

さて、第一図からいくつかの読み取りをおこなったのであるが、もつとも顕著な特徴としての「ゆるやかな上向きの勾配」は何を意味しているのであろうか。これより、今後の研究方向に指針をあたえるものとしてつぎのことが推定される。

幼児期の道徳意識の発達は、知能などのようにいちじるしくなく、非常に緩慢に押し進められるようである。あるいは一定の道徳意識が形成されたら、それ自体強力な持続性をもつようである。したがって、いまかりに道徳年齢というものを考へるなら、これは知能年齢のように1ヶ月単位で個人差をあらわすような性質のものではなく、おそらく半年乃至1年というような比較的長期間をもつて、道徳意識にかんする発達程度の表示尺度とすべき性質のものと推定される。

幼児の反抗期についての一考察

松濤幼稚園 林 貞子

幼児における反抗期の存在は古くから認められているが、これを客観的にとらえうるか否かを検証する。次に反抗期の発生条件とし

て、何らか数量的に測定できるものがあればやがて反抗期の予測も考えられると思われるのと、その第一歩として、反抗期開始の時期と、身長体重の変化、幼児の世界観の分化程度および話したことばの内容の発達の間に何らかの傾向を見出せるか否かを検証することを試みた。まず第一に幼児の家庭より質問紙によつてその幼児の反抗期の有無、有ればその開始の時期の答申を求め、これと幼稚園での受持教師の日常の観察による反抗期開始の時期と照合した結果次のようになつた。

総数 70名 (満三才～六才の幼稚園児)

完全一致：20名 一ヶ月のずれ：12名、三ヶ月のずれ：8名、五ヶ月のずれ：2名、七ヶ月以上のずれ：2名、入園前の者：12名未経験の者（この中には未経験のまゝ六才にいたるものも多數あり。）……十四名。

この評価のずれの絶対値の合計は七・五ヶ月で一人平均一・六八ヶ月である。この事実は反抗期がある程度の一一致した評価のもとにとらえられるものであることを示している。次に第二の問題については身長・体重を示す累積線の上に、反抗期の開始の時期を置く、まずそれぞれの累積線を構成している各点を通じてその点からもつとも脱逸度の少いと思われる位置に直線をあてはめる。次に反抗期開始の時期の前後二ヶ月合計四ヶ月をとり同様に直線をあてはめる。この二本の直線と水平線とのなす角をそれぞれ∠A、∠Bとして∠B/∠Aをとる。この比を一・五以上のプラス群、一・四～一・四までの1群、一・五以下のマイナス群に分けた結果は次のようになつた。

反抗期を経過した者の総数 四〇名

身長
一千群：5名
一群：30名
体重
一千群：13名
一群：5名

累線線全体とその一部分との比であるから後者に変動のあることは当然であるが、これがプラスかマイナスの一方に偏れば増加または減少の傾向といつものが存在することになるがこの実験の結果では何らそのような傾向の存在していないことを示している。第三の問題の世界観の分化については絵によって三題の問を出し個人面接の方法で答申を得た。「子どもが母親から日没前に帰宅することを命ぜられた。日没近く、子どもが母親の命令だから自分が家に着くまでそのまま待っていてほしいと沈みゆく太陽に頼んでいる。その子が家につくまで太陽は待っているか沈むか」というようないい間である。その結果は、七〇名の幼児中、三問分化二四名、二問分化二六名、一問分化十三名、全部未分化三名となつた。会話中に現われる文章の性格は文法によらずその内容によって分類した。十分間の個人面接により質問によって会話を導きテープレコードにとって後整理する。その幼児の話しことば中の文章の総数に対して自己およびその経験した事物の状態や思想を客観的に相手に伝えた文章、説明的批判的な文章の含まれたペーセンテイジを計算する。前章の世界観の分化の実験結果をその成積の形によつて七つの群に分け、各群に属するそれぞれの幼児のこの会話中のペーセントを平均すると次のようになる。

7	6	5	4	3	2	1
分	分	分	二一	○九%	二四名	
未	分	分	一五	八%	二名	
分	未	分	一二	七%	三名	
分	分	未	一一	七%	二一名	
未	未	分	六	二五%	二名	
未	未	未	二	三七%	一一名	
○	四	六%	七	七名		

すなわち分化の数の多い者ほど、文章の%は増加している。これを反抗期開始前後で比較することは困難（開始後に認められることなのでその直前をとることは難しい）であるので、反抗期の開始時期をすぎたものとそれ以前の者の二群に分けて、分化程度との関係を検証することとした。すなわち、たとえば三問とも分化している幼児で、会話中の文章の分化程度一%～一〇%の範囲の幼児が二名あり、中の一名が反抗期を未経験であれば、その範囲内で開始時期をすぎた者の%は五〇%である。これらの図にプロットすると、分化の数が多く、%も高い幼児に、反抗期の開始期をすぎた者が圧倒的に多い。ここには一つの傾向が現われているので、反抗期開始の時期を経過した者は世界観の上で分化しており、それと共に会話の中においても、自他の行動や思考内容を整理して発表することができやすいということが考えられる。これは年令の増加による発達と平行するとも考えられるが、三才から六才までの間で反抗期の時期はそれぞれ異なるにもかかわらずこのような値を持ったということとは、やはり反抗期の発生と何らかの関連を持つと考えてよいものではないかと思われる。

幼児期における自意識と 知能との相互関係について

西南学院短期大学部児童教育科

高橋さやか